

交流する人々 —重要伝統的建造物群保存地区を活用したまちづくり—

大 藤 文 夫*

People Who Participate Interactive Activity between Rural and Urban Communities —Community Development Utilizing Important Preservation Districts of Groups of Historic Buildings—

Fumio OOTOU

Interactive activity has been performed in depopulated areas. But it should be distinguished from tourism. Tourism contributes to economic development. Interactive activity contributes to activation of a heart. In this article, I clarify significance and problem of the interactive activity utilizing important preservation districts of groups of historic buildings, by case study of Hagi, Kasashima and Mitarai. The following points mainly became clear. Primarily, These districts are cultural assets, and are used for activation of community. Second, tourism is made up for by interactive activity in Hagi. Third, by interactive activity the heart of inhabitants becomes active in Kasashima and Mitarai. Last, however, the sustainability of community is put in the critical situation in Kasashima and Mitarai. Therefore, the next problem is how good circle of interactive activity and community development is made, and it is important that network of interactive activity is reinforced.

Key Words (キーワード)

Interactive activity (交流), Important preservation districts of groups of historic buildings (重要伝統的建造物群保存地区), Tourism (観光), Green tourism (グリーン・ツーリズム), Community development (まちづくり)

1. はじめに

多くの過疎地域で交流事業が取り組まれてきた。交流とは広義に捉えれば、双方の間で物、人、情報などの行き来があることである。またその前提として、肯定的な評価が双方に向けられていることがある。例えば都市と農村の交流とは、旧来の向都離村という一方的な流れに対し、農村への関心が高まるということである。ふるさと産品が都市へ届く場合も、農村への関心があるからであり、都市住民が農山漁村へ訪れる場合もそうである。

高度成長期に進んだ心の過疎は、無いことを嘆

くだけでなく、身近に有るものも無価値と思わせたかもしれないが、それは都市住民にとっては「緑と憩いの場」、「ふるさと」として読み替えられるものでもあった。観光農園、自然休養村、ふるさと会員・特別町民、オーナー制度、ふるさと宅配便など、身近に有るものを資源とした物と人の交流が行われてきた。1990年代には農業、農村の資源は、多面的機能として強調されるようになる。

このような過疎地域の再評価という流れの中で、交流は取り組まれてきた。とくに人の交流ではリゾートブームが地域を席卷した後、滞在型のグリーンツーリズム（以下、GTと略記する）が注目され、さらに二地域居住も構想されるように

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

なっている。本稿ではこの人の交流について考察する（以下、交流を人の交流の意味で用いる）。

過疎地域の中には、地域社会の持続可能性が危うくなっているところが多くある。そういう状況下で過疎地域が交流に取り組むのには、1) 経済的效果、2) 心の活性化、3) 人的ネットワークづくりといった目的がある¹⁾。まず1)に関して、もっぱら経済的效果を目的とする交流は、観光と呼ぶのが適切である。観光では住民の生活世界とは切り離された別世界があつたえられ、そこで非日常性が演じられる。交通、宿泊、飲食、土産など、成功すれば産業として期待できることから、過疎地域は定住者の仕事づくりのために、観光開発を受け入れてきた。リゾートブームはその最たるものであった。マス・ツーリズムではないとしても、ふるさと観光、個性的な体験ツアー、小さな観光といったように、観光は依然として交流の軸であり続けている。

次に2)に関して、心の活性化とはいわゆる地域の宝を探し、それを交流客にも開放し評価を受けることで、地域住民の心に灯りをともし（心の過疎に打ち克つ）というストーリーのことである。住民は交流客の感動を通して、自分たちが当たり前だと思っていたものの価値に改めて気づき、誇りをもつようになる。交流客の感動が住民に伝播するのは、ともに同じ世界を体験しているからである。そこには観光との違いがある。そして宝はモノに止まらず、コト、ヒトへと広がっていく。そうなれば、地域がまるごと博物館（エコミュージアム²⁾）となる。また地域の宝は自らの価値を映し出す鏡である。それを発見し、磨くこと（地域への認識）が深まっていけば、担い手を成長させるまちづくり（地域学・地元学³⁾）へと発展する。

最後に3)に関して、交流客には理解者、ファン、仲間、支援者といった役割が期待されることがある。そこにも観光との違いがある。観光は他人同士の間での「売買」⁴⁾であり、関係もその場で決済し、それ以上のことは期待されない。他方で連帯関係にある者同士であれば、接触場面での

「気前の良さ」⁵⁾、あるいは将来の返礼が期待される。将来の返礼には理解、支援といったものも考えられる。つまり交流では他人同士の関係を越えた、連帯関係、仲間関係への移行が目指されている。

現実に行われている交流の目的は複合的であるが、以上の点から、観光と2)、3)の観点から行われる交流を概念的に区別しておきたい⁶⁾。広義には交流は観光を含むが、狭義には観光と区別される。それは地域社会の担い手づくりを目的とするものである。以下本稿では、交流を狭義で用いる。再度、交流の特徴をまとめると、(a)自らの生活（様式）を交流資源として外部の人間に開くこと、つまり他者が生活の中に入ってくること、(b)そこで住民が何らかの程度において、非市場的なサービスの担い手になっていること、(c)住民の心が活性化すると同時に、交流客との仲間としての関係が作られようとしていることである。つまり交流は定住者の心の活性化、外部の仲間づくりを生み出すという点で、まちづくりの一手法となる可能性をもっている。

また交流する人々とは一方での迎え入れる側と、他方での訪れる側である。前者は当該地域社会に暮らす人たちである。後者は出身者またそれ以外の外部の人たちである。他出子が親元に里帰りするのも交流である。訪れる度に故郷を追体験し、仲間であることを再確認する。それ以外の人たちは交流体験を通して、仲間への入口に立つ。

交流は農山漁村だけで行われているのではない。地域の歴史性に応じて、交流に用いられる資源は様々である。農山漁村、伝統的都市、それぞれの資源がありえる。ただ現代の都市にはないものというのが共通項である。本稿では重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区と略記）を資源に用いた交流を採り上げる。重伝建地区は1975年の文化財保護法の改正によってつくられた「伝統的建造物群保存地区」制度において、国がとくにその価値が高いものとして選定するものである。1976年から2008年6月までに、83地区が選定されている。重伝建地区はいわゆる文化財であ

るが、その規制は内部にまでは及ばず、住民としてはその使い方に創意と工夫の余地がある。本稿のテーマに関わらせては、少なくとも観光資源と交流資源の両方の利用の仕方がありえる。

具体的には、山口県萩市、香川県丸亀市塩飽本島町笠島地区、呉市豊町御手洗地区の取り組みを事例として比較検討を行う。三地区は農山漁村ではなく、かつて繁栄した都市（城下町、港町）である。しかし戦後の工業化、都市化の波から取り残され、逆にそれによって歴史的まち並みが残った地区である。この歴史的まち並みも、現代の都市住民にとっては非日常性の空間である。以下、重伝建地区を資源とした三地区の取り組みから、交流によるまちづくりの可能性とその実現に向けての課題について考察する。

2. 観光、交流、重伝建地区

(1) 観光と交流

ここで改めて概念的に観光と交流の違いを示しておきたい。観光とは「楽しみのための旅行」⁷⁾であり、場所の移動（旅行）と非日常体験が要件

である⁸⁾。刺激であれ安らぎであれ、日常では味わうことができないのが非日常体験である。図1にあるように、私たちの居場所（「ここ」）の日常生活は仕事や学校である。しかし大抵は非日常性を演出するイベントや装置が隣り合わせになっている。一日の中の仕事帰りの一杯、季節ごとの祭り、繁華街などである。とくに都市の繁華街は毎日を祭りに演出し⁹⁾、人々の非日常へのニーズを吸収する巨大な装置となっている。そして居場所を離れることは、それ自体が日常の衣（役割）を脱ぎ捨てる契機にもなる。「遠くへ」という物理的距離は、「別の」という心理的距離も生み出す。このようにして、居場所を離れて「よそ」で非日常体験をする観光が成立する。生活が豊かになり、余暇時間が増えてくる、また交通機関が発達し、メディアが盛んに観光情報を提供する。そうなれば観光へのニーズは飛躍的に高まり、巨大な観光産業が展開する。また過疎地域の側も仕事づくりにつながるため、積極的に観光開発を行ってきた。いずれにせよ観光（開発）とは産業化の一手法である。

他方で、場所の移動、非日常体験は交流の要件

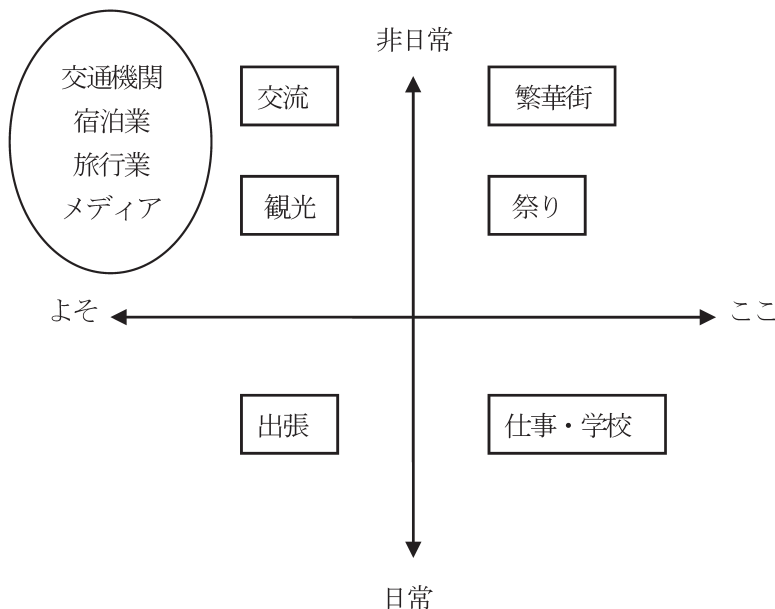


図1 観光行動の枠組み

でもある。しかし交流と観光は以下の点で異なる（図2参照）。通常、観光商品はそれ用のものとして、サービスを提供する人々の生活とは切り離され、囲い込まれている。観光客も商品の背景にある生活世界にはさしたる関心を持たない。逆に囲い込みに失敗する時、観光の負の側面や軋轢（生活は見せ物ではない！）が生じる。観光客は市場取引の相手であり、他人である。そこでは連帯関係は期待されない。そこでの資源やサービスは商品であり、演出、時には創造される（「感情労働」¹⁰⁾としてのホスピタリティ）。観光客の心は熱しやすく、冷めやすい。迎える側は資源を次々と更新することで、客の求めるサービスを提供し、客の欲望を積極的に引き出そうとする（テーマパーク）。それによって大きなお金を生み出そうとする。それは仕事という関係行為である。

他方、交流においては、資源は人々の生活と切り離されているのではなく、人々が生活において現に使っているもの、体験しているものである。客も資源の背後にある生活世界に理解を示しやすい。客の感動は迎える側の自己変容を生み出す。客は同好の士である。迎える側は時には解説者（ガイド）として振舞う。連帯関係が発生すれば、もてなし（おすそわけ）が行われる。客の側も節度をわきまえた、もてなしに答える行動をとる。仲間関係の中で、互いが従う規範や作法が生まれる。結果として、その場では、例えばお礼といった小さなお金しか生まない。それは仲間と一緒に楽しむという関係行為である。

結局、観光と交流の概念的な違いは、来訪者が地域生活から切り離されるか、迎え入れられるかにある。迎え入れられることによって、交流客は仲間となり、応援団の役割（将来の返礼）が期待される。

また交流の深まりの先に、定住が期待されることがある。しかし定住は荷の重たいものである。交流は「おいしいところだけを、一時的に味わう」ものであるのに対し、定住は「生活の丸ごとを、久しく引き受ける」ものである。定住のためには仕事を見つけると同時に、地域社会の一員になる必要がある。交流に期待されるのは、楽しむことを通して、まず客の側で地域社会への理解が深まっていくことである。

もちろんこれは交流が上手くいった時の話である。他人の中から仲間を選び出すことに失敗することもある。また現実には程度問題なので、観光か交流かという二者択一ではない。支払った以上の好意が示される観光もあるだろうし、もてなしの際にできるだけ返礼をしようとする交流もあるだろう。どのような事業を実施するかは、地域社会が戦略的に決めていけばよいことである¹¹⁾。

(2) 重伝建地区の特徴

重伝建地区は観光と交流の両方の利用の仕方がありえる。ここで重伝建地区の二つの特徴について確認しておく。第一に、重伝建地区の建物には「内は自分のもの、外はみんなのもの」¹²⁾という特徴がある。建物は文化財としての規制は受ける

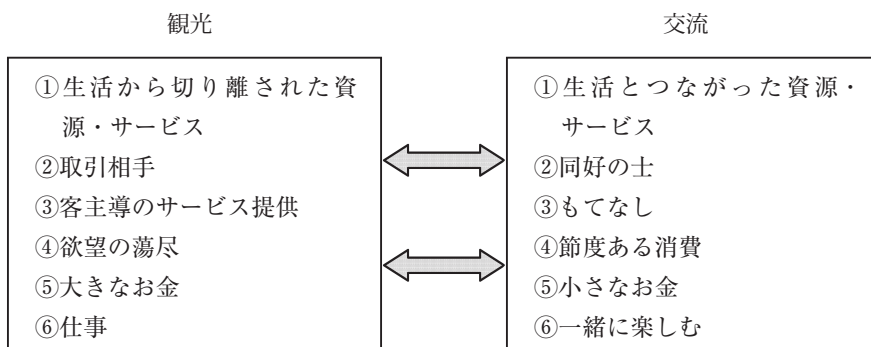


図2 観光と交流の違い

が、それは内部にまでは及ばない。江戸時代の建物であっても、江戸時代の暮らしをせよというわけではない。つまり一つの建物の内と外で切り分けがされるわけであり、「住宅をどうしようと自分の勝手」ではないが、「どうにもならない」ということでもない。内部と外部をどう使い分けするか、そこに住民の創意と工夫の余地があることになる。

また「外はみんなのもの」という場合、「みんな」に加えることができる人たちは様々にある。例えば自分自身、同じ重伝建地区の人たち、そして交流客、観光客である。どういった人に開くのかについても工夫の余地があることになる。

第二に、街として一つながりになっているということである。一つながりになっているものは、それぞれの部分が互いにプラスやマイナスの影響を与える。よって連携することで $+a$ が生まれる。例えば観光客にとっては、伝統的な一軒の家屋よりも伝統的なまち並みの方が、あれこれ見ることができて訪れやすいことになる。逆に一箇所マイナスがあると、全体に悪影響を与える。これは住宅街や商店街といった街（まち）に共通した特徴（＝コモنز）である。よってまち並みであるということは、連携が取れる場合には大きな財

産になる。つまり価値あるまち並みにしようとするれば、住民たちの連携が必要となる。そこにも住民の創意と工夫の余地があることになる。

3. 三地区の比較

(1) 三地区の概要

表1にあるように、三地区はともにかつては繁栄を誇ったが、戦後の高度成長期における産業化、都市化の波から取り残されたところである。条件不利地域にあることがその理由である。とくに笠島、御手洗は離島地区であることから、そのことが強く現れている。逆に取り残されたからこそ、まち並みという都市遺産が残ったともいえる。しかし遺産は守ろうとしなければ失われてしまう。都市の暮らしがどんどん入ってくると、利便性と昔のまち並の保存は衝突する。それでもまち並を残す、あるいは昔のまち並みを復活させるというのは、そこに価値を見出して何かに使おうとする運動があって可能になる。

三地区は観光、あるいは交流に取り組んできた。萩では「城下町、明治維新の人物」、笠島では「塩飽水軍の港町」、御手洗では「風待ち、潮待ちの港」という地域イメージを創り出してい

表1 三地区の特徴

	萩	笠島	御手洗
過去の繁栄	毛利氏城下町	塩飽水軍の港町	江戸時代の港町
立地条件	山陰の海岸（山口県）	瀬戸内海の離島（香川県）	瀬戸内海の離島（広島県）
重伝建選定年	1976（2001）	1985	1994
地域イメージ	城下町、明治維新の人物	塩飽水軍の港町	風待ち、潮待ちの港
観光	観光地	なし（失敗）	なし（これから）
交流	始めたばかり	活動の蓄積あり	活動の蓄積あり
推進主体	NPO萩まちじゅう博物館	自治会（NPO法人本島町笠島まち並保存協力会）	重伝建を考える会
生活	停滞	過疎化	過疎化
展望	観光と交流の二本立て	交流の推進	交流の推進、観光化

る。いずれも歴史性を光らせたイメージであり、都市住民にとっての非日常性、ノスタルジーに訴えかけるものである。また重伝建に選定された年は、萩が1976年（1976に堀内地区、平安古地区が選定、その後2001年に浜崎地区が選定）、笠島が1985年、御手洗が1994年である。ほぼ10年ごとの区切りになっており、状況論としてはその間に観光を巡る状況も変わってくる。そして三地区の取り組みの背景には、生活面での停滞、過疎という問題があったことも指摘しておきたい。以下、三地区について、関係者へのインタビュー結果に基づき¹³⁾、観光と交流の対比の点からもう少し詳しく述べておく。

(2) 萩

萩は山口県の山陰側にある。毛利氏の城下町であり、今でも江戸時代の区割りが残り、三ヶ所の重伝建地区と歴史上の人物ゆかりの地が点在している。萩はうまく観光化のスタートを切ったというべきであろう。萩が観光地として注目を浴びたのは、日本全体が高度経済成長によって豊かになっていったと同時に、失われつつあるもの、残っているものへの憧憬が人の心を捉えようとしていた時である。1970年代に入り、旧国鉄が「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンを行い、文字通り日本を発見し、自分自身を再発見する旅がブームになっていった。そういった流れの中で、中山道の妻籠・馬籠宿、倉敷、津和野などとともに、萩も注目されるようになる。萩焼、夏みかん…萩を彩る小道具が揃っていく。交通インフラ面では1975年に山陽新幹線が博多まで開通し、その年に萩は最大の観光客数を数える。しかしその後観光客数は減少傾向を続けていく。

そこで萩では、現在、「萩まちじゅう博物館」として交流の取り組みを始めている。「萩まちじゅう博物館」の考えをまとめると、次のようになる¹⁴⁾。(ア)住民が「おたから」を再発見し、守り育て、誇りをもって次世代に伝えていくことがまちづくりである。(イ)「おたから」は博物館の中だけにあるのではなく、まちじゅうにある。し

かも文化財だけでなく、歴史や文化、自然や民俗など、そこに物語をもつもの（産業：いりこ工場、かまぼこ工場も含まれる）である。(ウ)住民が誇りをもって住めるまちが観光客にも受け入れられる。つまり「おたから」を磨くまちづくりの活動が、観光振興につながるといっている。萩では観光と交流をとくに区別してはいないが、上述のように、両者は概念的には区別すべきである。従来の観光が苦しくなってきた時に、交流によって厚みをつけようとしているのが萩の今の取り組みである。例えば観光産業を成り立たせているインフラは、交流客も利用する。交流資源を発掘し、磨くことで、そのインフラ利用者をさらに増やすことができる。また観光産業の側にも新しい観光の動きがあり（スローツーリズムなど）、交流への接近がみられる。

萩では「NPO萩まちじゅう博物館」という推進組織をつくっている。メンバーは「この指止まれ」方式で集まった人たちで、必ずしも文化財に住んでいる住民ではない。会員は100人程度で、Uターン者、女性が多いという特徴がある。会の活動は、研究・保存、展示・情報発信・活用など多岐にわたるが、博物館の運営にも関わっている。そして「おもてなし」の一つとして、観光ガイドにも力を入れている。またそれとは別に、浜島地区では、住民のまちづくり活動と連動した形で交流が行われている。各家が年に一回「おたから」を展示するイベントを行い、家の奥にしまわれて、他人の目に触れなかった「おたから」を公開している。

(3) 笠島

香川県丸亀港からフェリーで30分程度のところに、塩飽水軍の本拠地として栄えた本島がある。この本島の北東部に笠島地区がある。重伝建地区に選定されてから、少しずつ整備を進めてきており、現在では統一された色調、建物のまち並みとなっている。不在家屋もあるが、そういうところも外観は整備されている。常住人口は143人、77世帯（2008年9月1日）¹⁵⁾である。

笠島の取り組みに際しては、過疎が進んでいるという危機感があった。しかし不在家屋もあることから、意見をまとめることができるかという問題もあった。結局、笠島では自治会がそのとりまとめ役として機能した。1982年に「笠島まち並保存協力会」が発足し、会長を自治会長が務めた。自治会がこのような活動を行うのは、共同問題の解決という、その期待される活動の点から、ごく自然なことである。不在家屋の人たちからも「(文化財に指定されるような)それだけの地域なら協力しましょう」ということで、了解が得られた。まち並み保存推進組織は現在、「NPO法人本島町笠島まち並保存協力会」となっているが、自治会とつかず離れずの組織であることは変わりなく、自治会の班長が理事を務めている。この会は交流客用施設の「笠島まち並保存センター」、「小栗邸ふれあいの館」、「文書館『藤井邸』」の管理、運営を行っている。また住民で街路、公園の清掃を行い、不在家屋の宅地内清掃も引き受けている。

笠島には産業としての観光インフラはない。過去において本島全体で観光産業が入ってきた時期があったが、失敗したとのことである。今、笠島で現実可能なことは交流であろう。同時にその交流客への期待は熱いものがある。「NPO法人本島町笠島まち並保存協力会」では、2005年1月から「民家民宿(大倉邸)」を運用している。空き家になっている民家を、一日一組に民宿として提供するものであるが、食事はついていない(自炊設備あり)。このような積極的な交流事業は始まったばかりである。スタート以来、子ども連れの家族を中心に、100人程度の利用者があった(2006年9月まで)。交流客に対するイメージは、「わざわざ選んで来て、いろんなことを聞いて、話がうまい」というものである。確かに好みとこだわりをもった人たちといえよう。そしてこういう人たちとの交流が、将来的に定住につながるのではないかと期待している。またそういう人たちに「おせったいの心」で接していこうとしている。

笠島の場合一般の交流客だけでなく、島外の笠島出身者との交流も行われている。例えば島外の笠島出身者もNPO会員になっており、年会費3,000円である(居住会員は1,000円)。島外の出身者にとっては、誇れる郷土を守っているのは居住の人たちであり、居住の人たちに「管理してもらってありがとう」という気持ちをもっているとのことである。また年一回の「笠島まち並みふれあい祭り」にも出身者が帰ってきている。このように笠島の交流事業は、担い手を育てようとするまちづくりの活動を目指している。出身者とは思いついた誇れる郷土を共通項として、また一般の交流客とは将来そうなるかもしれないという期待をあてにしてである。しかし大きな問題は、過疎、高齢化の進行である。交流の中から生活自体の再生産、持続可能性をどう編み出していくのか、これが課題である。

(4) 御手洗

呉市豊町御手洗地区は大崎下島にある。2008年10月時点ではなお離島で、車で行くとすれば、フェリーを使うことになる。地区内の建物は色や建築方式などに統一性をもたせ、景観を保存するために地区全体で協力している。しかし雨戸がおりたまの不在家屋もかなりある。人口は296人(住民基本台帳2008年9月末)¹⁶⁾で、高齢化が進んでいる。観光客対象の店はなく、交流施設として潮待ち館がある。2008年11月には念願の橋が架かり、離島ではなくなる。

保存地区の選定は行政主導で進んだ。それを受けて、住民組織「重伝建を考える会」がつくられた。「選定されたことで観光客が来る。どう対応するのか」、「御手洗をなんとかしないとイケない」と考え始めた住民有志が立ち上げたものである。今では会員はむしろ島外会員の方が多く、島外会員は御手洗出身者がほとんどである。

会は保存地区について考え、まち並みを保全していくことを基本的な活動目的としている。ただし、まち並のいわゆるハード面は行政に任せて、自らはソフト面、つまりそれを活かす工夫に関す

る活動を行っている。例えばガイド、歴史と文化を学ぶ勉強会、情報誌『みたらい通志』の発行、まち並みや神社等の清掃活動などである。

もちろん最初から活動がうまくいったわけではない。多くの人は自分の地域がそんなたいしたところだとは思っていなかったし、観光客なんか来るわけがないと思っていたそうである。そして観光ガイドを始めた時も、「暇だからやっている」、「好きでやっている」と思われたとのことである。具体的にはイベントを行うことで住民の意識を変えていった。例えば著名人を招いての雅楽コンサート、俳句の会である。その時、地元のグループと共同開催し、地元の活動を知らせるようにし、御手洗地区の再認識、再評価につなげていった。その後フォトコンテストや落語の会なども行っていく。御手洗のまち並みの再評価とともに、文化の再評価も仕掛けていったわけである。

このような活動を5年くらい続けることで、住民の見方が変わってきたそうである。その頃に「住民皆ガイド」を提唱した。住民が交流客にガイドをしよう、それが難しければ、潮待ち館に行けばガイドしてくれる人がいるといおう、それが難しければ、挨拶しようという運動である。それによって住民の意識が変わったとのことである。今では軒に一輪挿しを飾るという、細やかな気配り活動も行われている。

選定後、事業によってなによりも街がきれいになったとのことである。そして重伝建を考える会の活動によって住民の意識が変わった（全ての住民ではないにしても）といえよう。変わったのは心に灯りがともったということではないだろうか。住民皆ガイドというのは象徴的な運動である。もちろん会の活動以前は、ガイドするに値する地域の宝があるなどとは思っていなかったであろう。まずは勉強会がある。埋もれていた（気づかずにはいた）歴史を再認識していく。すると自慢できる歴史が浮かび上がってきたわけである。そうすると心に灯りがともる。自らのまちの良さを誇りをもって語ることができるようになる。このように交流客を意識した活動を行うことは、結果

としてまちづくりのエネルギーを生み出すことになる。

他方、住民のまちづくりの活動は交流客にとっても味わいのある体験を提供する。重伝建地区といっても、ハードな部分だけでみれば、まち並みでしかない。眺めるだけでは、あるいは車で通り過ぎるだけでは、その味わいは分からない。まちを味わうにはコツがある。それを教えてくれるのがガイドである。そこに住んでいる人がそこにある物語を語ってくれるわけである。私たちは物語があって始めてその対象の意味を理解する。いわばガイドは語り部である。しかも語りが上手であれば、私たちは惹き付けられてしまう。例えば「七卿館というのがあって、そこには幕末の…」となると、それは歴史の一こまがこの場所で演じられたということになる。歴史好きの人には魅力である。

そして物語は過去だけに限らず、今現在の物語もありえる。例えば、先ほどの住民の心に灯りをともすために行われた伝統文化のイベントを、交流客にも開くことも考えられる。このまち並みでそれらが行われているとすると、そこに御手洗のまち並みの現在の活かし方の一つが現れていることになる。まち並みとあった今の生活様式、まち並とともにある暮らし、この体験も一つのソフトになる。それはただ眺めて廻るだけでは獲得できない、深い体験である。

以上、三地区の比較を行ってきた。重伝建地区という資源は観光、あるいは交流に用いることが可能である。観光の場合はインフラに依存するところが大きい。新規の観光化は地域社会にとっては大きな跳躍である。他方、交流の場合は普段の生活に少し工夫を加えて客に開けば良く、いわば住民の等身大の活動である。過疎地域で取り組みやすいのは交流である。そして御手洗で確認できたように、定住者の心の活性化＝まちづくりの担い手としての成長は可能である。よって次の課題は、交流客をまちづくりの担い手として引き入れることである。

4. 交流の中での担い手の育成

三地区でみてきたことから、交流を通して育つまちづくりの担い手についてまとめておく。担い手としては、①定住者からなる住民組織、②故郷という物語をもつ出身者、③物語に魅せられた交流客が考えられる（図3参照）。まちづくりの担い手には、まちに係わるモノ、コト、ヒトを我がこととみなす当事者性が求められる。

まず定住者からなる住民組織である。通常、地縁型組織、またアソシエーションがその候補となる。三地区でみてきたことから、自治会とNPOがそれに該当している。笠島では自治会が当初から担い手であった。また御手洗では当初は自治会とは別組織であったが、現在では連携している。自治会の係わりが自然であるのは、「街として一つながりになっている」という重伝建地区の特徴による。そこでは一ヶ所のマイナスは全体の価値を減価させ、逆に全体の協力は付加価値を生む。よって面的な取り組みが必要であり、建物の所有者たちが互いに切り離すことができないものを管理する活動が必要である。共同生活を管理す

る組織という自治会の基本的な性格に係わる部分である。その活動内容は、選定への同意に始まり、ガイドやイベントといったソフトな活動、さらには建物の維持、管理にも係わることが期待される。それは自治会活動の発展形態である。

他方、萩ではNPOが担い手であった。メンバーは必ずしも建物の所有者ではない。しかし重伝建地区の価値を評価する利用者として、その管理に係わることは可能である。管理に係わろうとする人たちの意志と、重伝建地区の「外はみんなのもの」という特徴（公益性）がそれを可能にするといえよう。このように所有者に止まらず、利用者である地域住民の管理への係わりを積み上げていけば、地域全体を博物館として運営する地域博物館構想に行き着く。萩と同様に、他の多くの地域でそれが展開されている。NPOの係わり方としては、その特徴の一つである専門性を活かすという展開が期待される。地縁組織にしる、アソシエーションにしる、係わりは可能なのであって、要は各々の特徴を活かした連携が望ましいであろう。

次は出身者、交流客である。彼らは「みんな」

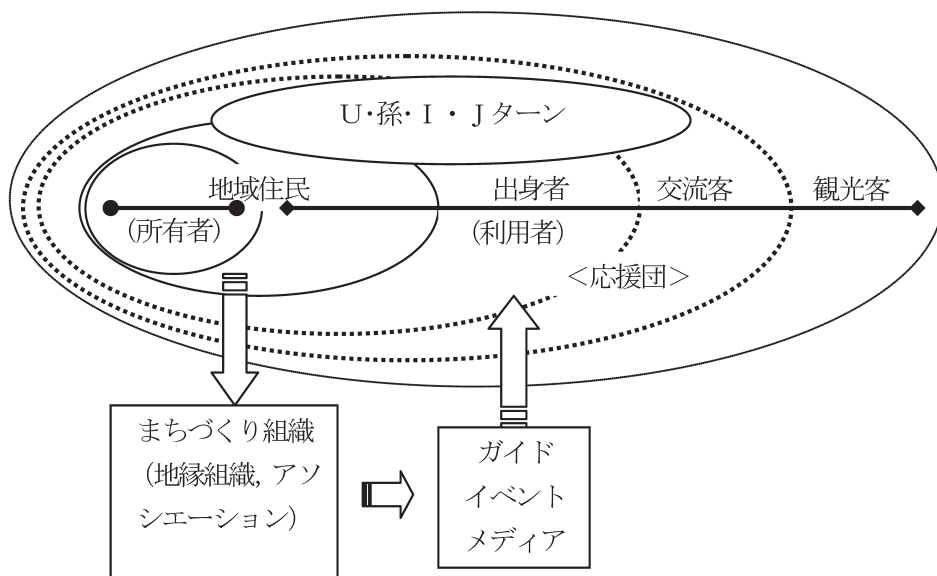


図3 交流ネットワークの中での担い手の育成

の中でも遠い人たちに属する。しかし故郷という物語をもつ出身者も、物語に魅せられた交流客も、同じくその地域の物語を味わう人たちであって、想いをもってそこに係わる利用者である。また受け入れる側の故郷をともにするという気持ち、あるいは同好の士を喜ばせようとする気持ちも自然なものである。他方で出身者、交流客には受け入れ側の生活を乱さない節度ある行動、先延ばしされた返礼の実施が期待される。笠島、御手洗で強化すべきは、これらの出身者、交流客との関係である。

最後に観光客は「みんな」の中で、最遠の人たちである。観光客はまちに係わるものを我がこととみなさないで、当事者性をもたない。

5. おわりにーまちづくりと交流の好循環

最後に御手洗のこれからを展望しながら、交流によるまちづくりをさらに進めるための課題を指摘しておく。御手洗の場合、住民の心に灯りをとすということでは一つの到達点に達している。これからの課題は地域社会の再生産を目指して、交流がまちづくりのエネルギーを生み、まちづくりが交流を支えるという好循環を創り出していくことである。そのためには二方面での取り組みが必要である。

第一に、出身者、交流客との関係強化である(図3参照)。これらの人たちに現実に応援団になってもらうことである。来訪者を惹き付けるためにはソフト(体験、イベント)の充実が必要である。伝統的なものに限らず、まち並みに合うような新たな体験、イベントを考えても良いであろう。重伝建地区という資源からすれば、文化型、学習型のものが良いだろう。地域博物館機能の強化である。また盆、正月に帰ってきている出身者に合わせたイベント(ふるさと、思い出にかかわるイベント)があっても良いだろう。そして体験の前には情報の交流が必要である。笠島、御手洗ともに、ホームページ機能のいっそうの充実が求められる。例えば同好の士は興味、関心の強い層

であり、ホームページを探索することを厭わない層である。載せてさえおけばアクセスしてくれるという利点を活かすべきである。このような働きかけによって、来訪者に会費、寄付、宣伝といったまちづくりにつながる行動をとってもらうことである。

第二に、まちづくり組織の充実である。まちづくりは総合的なものであるから、交流も含めて、地域社会全体をマネジメントする組織が必要である。しかし過疎・高齢地域では地域機能は弱くなっている。そういう状況でいかにして力を結集するかである。例えば御手洗には自治会、「重伝建を考える会」も含む「各種団体連絡協議会」がつくられている。現状で活動している団体を集めたものである。例えば地域社会全体のことをこの組織が管轄し、とくに交流事業に係わっては、専門部会で対応することが考えられる。活動内容としては、これまでのガイド、イベントといったソフトな活動と同時に、建物の維持、管理にも係わることが考えられる。例えばこれまでも家を解体しようという住民を説得したということもやってきており、それをもう少し積極的に展開することである。

2008年11月に、念願の橋が架かる。インフラの大きな要素である、交通アクセスが改善される。これによって御手洗は新しい段階に入る。今以上の観光客、あるいは交流客が期待できるだろう。また他地域の資源とつながった、広域的な展開も可能になる。観光か交流かという二者択一ではないが、地域社会で将来を見据えて両者をどう重みづけて、コントロールしていくかが問われる。

過疎地域にとっては、交流は重要な取り組みであり続けるだろう。それだけによく練られた取り組みを期待したい。本稿では主に迎える側に立った議論をしてきたが、訪れる側の分析が必要なことはいうまでもない。また出身者やそれ以外の交流客が、実際にまちづくりの担い手になる道筋を検討すべきである。さらにいかにして定住につなげていくのかも問われるべきである。これらの点については、今後の課題としたい。

付記

本研究は2006年度の呉地域オープンカレッジネットワーク会議の地域活性化研究助成金を受け、「呉市豊町の観光振興についての調査研究－『新しい観光』によるまちづくり」－と題して行ったものである。本稿は同研究報告書の内容に加筆、修正して作成した。研究に当たっては呉大学社会情報学部の学生（望戸亮乃、和田希美加、北川沙織）、同僚（鶴岡和幸）と共同して行った。よって本稿は共同の成果物である。また調査に当たっては呉市の職員の方を始め、三地区の関係者の方々に多大のご協力を頂いた。ご協力頂いた方々に深く感謝したい。

注

- 1) 徳野は都市農村交流にみられる農村振興や地域活性化などの政策目標を①地域の人口（担い手）の確保、②地域経済の浮揚（所得の向上）、③地域住民の活動の活性化と満足度の向上にまとめている。また土屋もG Tの地元への効果として、経済面での効果（収入、雇用、知名度アップ）、精神面での効果（やる気、元気、誇り、視野、問題意識など）、交流による効果（人脈づくり、情報ネットワーク、ファン、常連各→将来的には移住）、環境保全面での効果（地域の土地利用、環境の健全化）を挙げている。徳野貞雄、2008、農山村振興における都市農村交流、グリーン・ツーリズムの限界と可能性－政策と実態の狭間で、日本村落研究学会編、年報 村落社会研究 第43集 グリーン・ツーリズムの新展開－農村再生戦略としての都市・農村交流の課題、p.55。土屋俊幸、2006、グリーンツーリズムの理想と現実－岩手県の事例から考える－、人間と社会、第17号、東京農工大学、pp.46-47。
- 2) 大原一興、2005、(3) 施設と地域の再構築：エコミュージアムと高齢者施設にみる（Ⅲ 人・空間・施設の再構築、<特集>生活環境のリストラクチュアリング）、建築雑誌 Vol.120, No.1533, p.20。
- 3) 吉本哲郎、2006、町や村の元気をつくる「地元学」、Consultant, Vol.233, 建設コンサルタンツ協会、pp.36-39。
- 4) 橋本は観光を「売買」と定義し、「すべてのサービスに代価が支払われる。その『取り引き』的關係が『統合』的關係に進展することは予定されていない」とする。橋本和也、2001、観光人類学の戦略－文化の売り方・売られ方－、世界思想社、p.116。
- 5) 同上、p.116。
- 6) 青木はG Tを観光から区別する必要性を指摘し、G Tを「農山漁村の有する歴史・自然・社会・文化など、多面的な資源を活用した、都市住民と農村住民による、対等かつ継続的な交流活動」としている。とくに対等性は観光には見られない特徴である。青木辰司、2004、グリーン・ツーリズム実践の社会学、丸善株式会社、p.64。
- 7) 岡本伸之、2001、観光学入門－ポスト・マス・ツーリズムの観光学、有斐閣、p.2。
- 8) 東徹、1999、観光行動、長谷政弘編著、観光ビジネス論、同友館、pp.107-108。
- 9) 松平誠、1994、現代ニッポン祭考－都市祭りの伝統を創る人びと－、図書印刷、p.18。
- 10) 須藤廣、2008、観光化する社会－観光社会学の理論と応用、ナカニシヤ出版、p.22。
- 11) 徳野はG Tがもたらすのは、+ aの補助的収入であることを指摘している。また筆者が安心院のグリーン・ツーリズム調査を行った際、「兼業（農家）を続けていくためのG T」というのが、農泊を行っている関係者の意見であった。G Tは観光を目指さないということである。他方、連帯を作りたい交流では「もてなし」、「おすわけ」という言葉がよく使われる。しかし踏み込んだとしても、仲間づくりに失敗した時、交流疲れがおきる。客との距離の取り方が重要である。徳野、前掲論文、p.75。
- 12) 田村明、2005、まちづくりと景観、岩波新書、pp.10-12。
- 13) 各地区の記述は2006年に行ったインタビュー調査によるものである。

14) 萩まちじゅう博物館ホームページ参照.

[http://machihaku.city.hagi.yamaguchi.jp/machihaku.
htm](http://machihaku.city.hagi.yamaguchi.jp/machihaku.htm)

15) 丸亀市役所調べ.

16) 呉市役所調べ.